

鋼製型枠のトップメーカー

## 株式会社ケーエムエフ

株式会社ケーエムエフは建設業界で使われるプレキャストコンクリート製品用の鋼製型枠のメーカー。国内の型枠市場は約400億円規模だが、同社は過去30年間、市場でトップシェアを守り続けてきた。近年はさらなる事業拡大に向けて、建設以外の分野で切削加工や溶接に力を入れ始めている。また、2017年中に、初の海外進出となるインドネシアで生産拠点開設の準備を進めている。ケーエムエフは、18年7月に創業50年を迎えるが、今後は型枠を中核に複合的な機械加工事業者へと事業の翼を広げようとしている。



花泉工場 外観

### ■コンクリート工事に不可欠な鋼製型枠

現代の建築、土木の構造物にはコンクリートが多様に使われている。ビルやマンションの梁や柱、高速道路や橋の橋脚には鉄筋や鉄骨が使われ、コンクリートがそれら建築材料を覆うことで構造物の強度を維持している。あわせて、コンクリートは建物にデザインや意匠を持たせる重要な役割も果たしている。

一般的にコンクリートは、建設現場でミキサー車などを使って生コンクリートを流し込み打設する。コンクリートを所定の形状に正確に凝固させるため、あらかじめ枠を設置し、その中にコンクリートを流し込むが、ここで使われる枠のことを「型枠」と呼んでいる。

ケーエムエフが製造する鋼製型枠は、コン

クリートを現場で打設するのではなく、あらかじめ工場でコンクリート製品を製造し現場で組み立てる「プレキャストコンクリート」を作る際に使用するもので、同社は創業時から一貫して鋼製型枠を作り続け、建築、土木の現場に提供してきた。

### ■高度経済成長で生まれたビジネス

ケーエムエフ（KMF）は1968（昭和43）年7月、現小島英一会長が小島メタルフォーム工業として、東京都大田区大森で創業した。現社名は小島メタルフォーム工業の頭文字から取り、92年に社名変更している。創業当時、英一会長の実家は、町工場が集積する大田区六郷で製缶業を営んでいた。英一会長は事業をそのまま継ぐのではなく、製缶で培った技術やノウハウを生かして何か新しい事ができないものかと思いを巡らしていた。考えた末に思いついたものが建築用コンクリートパネルの型枠製造であった。

この事業のヒントは霞が関ビルディングにあった。当時、日本は高度経済成長の直中で、経済繁栄を象徴する霞が関ビルディングが日本初の高層ビルとして誕生（1968年4月竣工）したのもこの頃だが、英一会長は霞が関ビルディングの建設が進むのを眺めなが



熊谷工場・生産風景

ら、“これからは日本でも高層ビルが増えていく。ビルの外壁はコンクリートの壁で作られているから、鋼製型枠を数多く使用するニーズがあるはずだ”と考え、新規事業として同社を立ち上げた。その狙いはズバリ的中した。鉄を材料に建材用のコンクリートの型枠を作り始めたところ、同社には次々と仕事が舞い込んできた。

創業後しばらくは大田区に工場を構えていたが、受注量が増えるのと並行して、受注製品が次第に大型化し、生産に必要なスペースが手狭になった。また、当時、埼玉県川越市内に大口顧客がいたことから、72年12月、同じ埼玉県の大里郡江南町（現、熊谷市）に熊谷工場を建設した。同社は新工場の建設を契機に事業拡大を目指し、既存の建築製品用型枠から土木製品用型枠の製造にも参入した。土木では、橋梁をはじめ高速道路の床版やトンネルの壁面用型枠など大型から小型製品まで幅広く手掛けている。

ケーエムエフの型枠を使って作られた代表的な製品では、建築分野が、六本木ヒルズ、丸の内ビル、品川インターシティなどの外壁があり、土木分野では、東北新幹線、九州新幹線、北陸新幹線のスラブ軌道用の型枠、つくばエクスプレスの防音壁、リニアモーターカー実験線の側壁などに同社製の型枠が使われている。また、海外では台湾新幹線のスラブ軌道用の型枠に採用された実績を持つ。日

本国内で鋼製型枠を生産する事業者は、大半の業者も建築または土木のどちらかの分野に特化しており、ケーエムエフのように建築、土木の両分野を手掛ける企業は数少ない。

### ■環境に配慮した「庭園の中の工場」を建設

事業の順調な拡大を背景にケーエムエフは熊谷工場に続いて、現在の基幹工場となる花泉工場を86年に岩手県一関市花泉町に建設した。同社のHPを見ると分かるが、鋼製型枠の生産工場とは思えない佇まいを見せる。花泉工場は「庭園の中の工場」をテーマに作られ、設計から工場内緑化の維持管理まで自社で取り組んでいる。一般的に工場を建てる場合、工業団地など生産に必要な付帯設備が整い、土地の平らな場所を選定するが、花泉工場には平面の場所がほとんどなく、斜面に覆われている。同社はわざわざそうした場所を選んだ。その理由について小島浩光社長は、「先代社長は花が大好きで、斜面に花や木を植えたいという考えを持っていた」と話す。進出当時、町名も「花泉町」で、“花と泉”の町という名前も気に入ったという。町の名前にちなんで花の種を一般の人に無償で配って、それを道端に植えて貰ったり、社員も自分たちで工場に花を植えて世話をしている。

そうした取り組みが評価されて、花泉工場は岩手県および町が主催する「花いっぱい運動」で20年以上にわたり表彰を受けている

ほか、04年に「優良緑化工場」として経済産業大臣賞、12年には緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰を受けるなど数多くの表彰を受けている。小島社長は「働く場所の環境は大切。花を植えたり育てたりすることを通して、社員教育にもつながる」と取り組みの意義を話す。

## ■型枠を中心に事業の幅を広げる

04年7月、創業者である小島英一社長は経営のバトンを婿養子の浩光氏に渡した。小島浩光氏は秋田県横手市の出身で、実家は横手市内で電子部品の製造を手掛けていた。いずれは実家を手伝う予定で、大学卒業後は大手コンピュータメーカーで働いていたが、家業は兄に託して、自身は結婚を機にケーエムエフに入社した。当初は畑違いのコンクリート型枠業界に戸惑ったものの、持ち前の明るさと、フットワークを生かした情報収集力から、現在では英一会長の路線を踏襲しながらも、次第に独白色を打ち出している。

その1つが事業の拡張である。建設業界は2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催までは競技施設や道路、宿泊施設などの建設が進む特需が期待されるが、小島社長は20年以降には市場の縮小均衡が続くと判断、今後の自社事業について、鋼製型枠の製造技術で培った機械加工や組立経験を他の分野に生かすことで売上、利益

を拡大させていく。

鋼製型枠の用途は建設業が対象だが、製品自体の製造は機械加工に近い。顧客のニーズに基づき、製品を精密に設計し、材料の鉄をレーザー加工機などで切断、その後、溶接を行うなどして所定の形状に仕上げる。小島社長はこの技術を建設以外の分野に応用しようとしている。既に防衛装備品に使われるジグ（工作物を固定する道具）や航空機工場で使われる部品の加工、製鉄工場での製缶加工など建設業界とは異なる分野の製品受注に成功している。今後も新分野の受注に力を入れるが、その戦略として事業買収を進めている。

第1弾として15年3月、内燃機などの切削技術に経験豊富な企業を事業買収したほか、現在までに同業の型枠事業者やバルブメーカーを傘下に収めている。この結果、同社の売上高は現在の27億円（2017年3月期）から、3年以内には50億円程度に増える。小島社長は「コンクリート型枠は当社にとって一本の太い柱。この柱はこれからも守り抜きながら、柱をさらに二本、三本と増やしていく。たとえ、型枠業界の規模が半分になったとしても増益を目指していく」と意気込んでみせる。

## ■初のインドネシア進出を目指す

事業拡大を進める上でもう1つの核になっているのが海外事業だ。ケーエムエフは17



鋼製型枠の製品事例

年、インドネシアへの進出を目指している。小島社長は5年ほど前、仕事でインドネシアを訪問したことがきっかけで、その後毎年、インドネシアから技術研修生を受け入れている。これまでに同社で学んだ研修生は30名近くにのぼる。研修生の受け入れに並行して小島社長もインドネシアに足を運び、現地の型枠市場を調査し、鋼製型枠の需要が十分ある事を突き止めた。このため、2年ほど前から現地生産を念頭にインドネシア企業への営業活動を始めた。ところが、当初どの日系企業を訪ねても「型枠などグローバル調達できるから、インドネシアで生産しなくてもいい」と門前払いの日々が続いた。しかしその後、日系企業が現地で受託した建設工事で、型枠に起因する工事の不具合が多数起きていることが分かった。小島社長は“これは転機になる”と、あらためて日系企業にケーエムエフが建築、土木分野で幅広く実績があることを自ら出向いて直接セールスすると、今度は一転して次々と技術供与依頼の話が舞い込んできた。

ケーエムエフはこの動きを契機に工場進出を加速させている。16年9月にジャカルタ市内に事務所を借り、17年9月までに生産法人を立ち上げる計画だ。第1弾は、現地企業と合併で土木向けの鋼製型枠を中心に生産する。現在、ジャカルタ近郊で建設予定地を探している。生産開始後は、インドネシアを拠点にASEAN（東南アジア諸国連合）各地に生産した型枠製品を輸出していく構想を描いている。小島社長はインドネシアへの進出事業を来年に控える創業50周年の目玉事業にと考えている。

### ■次代を見据えてビジネスチャンスをつかむ

人口減少が続く中、建設業界では人材の確保が難しく、その状況は深刻化しているが、小島社長はこの逆境をビジネスチャンスと捉えている。「人材難が続けば、人を確保でき

ない前提で仕事を進める必要がある。キーワードは“省人化”“自動化”だ。少量多品種に対応できる自動生産設備を開発してみたい」とビジネス環境の変化を先取りした意気込みを見せる。また、現在、建設現場の作業員が十分に確保できない中、プレキャストコンクリートの需要も、今後増えていくことが期待され、これも事業推進の追い風になっている。小島社長は創業50年を目前に控え、次代の自社の姿をどう描くのか構想に余念がない。「50年後も社会インフラは必要になる。次の50年は、現在よりさらに業界のトップメーカーとして頑張っていきたい」と目を輝かせる。

#### 企業概要

### 株式会社ケーエムエフ

<http://www.kmf.co.jp/>

代表取締役：小島 浩光

創 立：1968年7月

事業内容：コンクリート製品用鋼製型枠の製造・販売

本 社：東京都港区芝公園2-9-5

《熊谷工場》：埼玉県熊谷市成沢1195

《花泉工場》：岩手県一関市花泉町涌津字石畳85-28

電話番号：03-3434-0321

取引店：東京支店



小島 浩光 社長